



## 「笹川杯作文コンクール 2010」～中国語で応募～ 第 5 回優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

### 「もし、中国にも高橋陽一先生がいたならば」

#### 山東省 付曉利

今年の南アフリカワールドカップで、期待を集めていなかった日本代表チームがアウェーで最高の成績を収めた。3:1 でデンマーク、1:0 でカメルーンを破り、堂々の 16 強に輝いたのである。

日本代表の飛躍は、FIFA のアジア政策をも変え、2014 年のワールドカップ参加枠としてアジアに 3.5 チームを確保させるに至った。この功績により、中国代表も間接的に恩恵を得ている。日本などのアジアチームが卓越した成績を残したことにより、中国がワールドカップに進出するチャンスを得ることができたことには、中国人として恥ずかしいものがある。中日両国には完璧なリーグ体制やチーム制度があり、中国のサッカー人口は日本のそれよりずっと多いのだが、一体なぜ、日本サッカーは二十数年の間にこれほどまでの飛躍を遂げたのだろうか？ 答えを言うと、サッカーに無関心な人は信じないかもしれないが、漫画『キャプテン翼』のせいである。

1980 年代、日本サッカーのレベルは低く、ランキングも中国より下であった。漫画家でありサッカー評論家でもある高橋陽一先生が、漫画『キャプテン翼』を創作して雑誌に連載を始めると、この漫画は瞬間に日本を風靡した。そして、日本の少年達の中には国の代表としてサッカーに打ち込もうという気運が高まったのである。では、この作品には一体どのような魅力があったのだろうか？ 『キャプテン翼』を開くと、この物語は、日本の緑のフィールドに立つ少年達が、国際サッカー界に突然姿を現し、一歩ずつ世界制覇を成し遂げていくものであるということが分かる。

この作品の素晴らしさはストーリーだけではなく、絵も生き生きとしていることである。さらに素晴らしいのは、初期の『キャプテン翼』の登場人物が豊かな表現で描写されていることであるが、これは 1970～80 年代のサッカー界の大スターを分析した結果のようである。ドイツのフォワードとして描かれたカール・ハインツ・シュナイダーは、カール・ハインツ・ルンメニゲがモデルである。そして、こうした大スター達は、当時のサッカー少年達の憧れであった。彼らを主人公の仮想敵に仕立てることにより、日本人の英雄崇拜や弱みを見せない民族感情に合致させただけでなく、サッカー少年達のプライドを大いに刺激し、日本の青少年のサッカーに対する情熱をかき立てたのである。その後、1970～80 年代に日本国内で突如熱狂的なサッカー崇拜が起こったのも理解に難くない。

20 年後、サッカー文化はついに日本サッカーの成績に効果を表し始めたのである。2000 年から日本サッカーは最盛期を迎えるのであるが、個性豊かな主力メンバーは意外なことに自らを漫画の主人公に喩えていた。日本サッカーの大スター中田英寿、城彰二、そして今年のワールドカップで異彩を放った本田圭佑が、より直接的に、自分は『キャプテン翼』を見て育ち、『キャプテン翼』に大きな影響を受けていると語っていたのである。

これもひとえに、作者の高橋先生が絶えず世界サッカーに関心を注いできたことによる成果である。高橋先生は正真正銘のスポーツファンであり、苦勞して築き上げた“サッカー界の夢工房”を無にしないよう、全ての作品を世界サッカー界の実情に近づけて描いてきたのである。『キャプテン翼－ワールドユース編』以降、先生は『キャプテン翼』の路線を拡大することなく、世界サッカーの変化に応じて『キャプテン翼』の登場人物やシナリオを変えてきた。個人を英雄視する描き方を徐々に薄め、世界サッカーの中心をブラジルからヨーロッパへ移し、全面的にプロリーグを導入したりした。それから続編である『ワールドユース特別編』、『Road to 2006』が創作され、その他の特別短編も気運に乗じて絶えず生まれてきたのである。

『キャプテン翼』を連載してきた二十数年の間、高橋先生が保守的になって進取の精神を失うなどということは一切なかった。むしろ反対であり、作品の各段階において国際サッカー界の潮流に合わせていて、専門家に遅

れを取るなどということは全くなかった。だからこそ、『キャプテン翼』は常勝不敗、1つの時代の啓発であり、日本の最も基本的なサッカー文化となったのである！

実際、『キャプテン翼』の日本サッカーへの貢献には、漫画作品の域を超えるものがある。多くの日本代表メンバーが自らをその主人公に重ね合わせているだけでなく、重要な試合の前には、日本の多くのメディアが実際の代表メンバーと『キャプテン翼』のメンバーとを考え合わせてスコアリングする形で両陣営の主要な人物を評価していたりする。ワールドカップのドイツ大会の前には、川口能活をキャプテンとする主力メンバーの陣容を『キャプテン翼』の若林源三をキャプテンとするメンバーの身長、体重、背番号、ポジション、チームや特技などと対比して試合を展望した。この漫画の影響がどれ程のものであるかをお分かり頂けるだろう。

20年近い世界サッカー史を紐解くと、これほど短期間でここまでの進歩を遂げた国家代表チームは恐らく存在しない。高橋先生一人の功績だとは言わないが、こうした人々が共に努力したことにより、日本サッカーは繁栄への道を歩んできたのである。ここ二十数年の日本サッカーの戦績を見てみよう。1999年世界ユースの準優勝、2000年アジア杯の優勝、2001年コンフェデレーション杯の準優勝、二度のワールドカップ16強である。もう少しで『キャプテン翼』のシーンが再現できそうである。『キャプテン翼』と共に育った彼らが成功を収めたのである。

逆に中国サッカーを見てみると、同様の体制、チーム構築、プロフェッショナル管理を擁し、投資額や人材は日本より豊富である。しかし、数十年来まるで進歩がなく、培われたものはプロ選手の懐と苛立ちだけである。サッカー界に足を踏み入れたその日から、格好いい先輩達が中国サッカー少年の模範になっている—サッカーは、名誉と金のため。だから、中国サッカーには不祥事が絶えない。何年も足踏みしているというだけでなく、八百長や不正審判も後を絶たないのである。

中国サッカーには、優れた文化による導きが非常に必要なのである。サッカー協会が次に重視すべき仕事は、サッカー文化の構築だろう。高橋先生のような、サッカー文化を伝えてくれる人を探し出さなければならないのだ。中国サッカーには人材が不足しているのではない。サッカー文化による感化と薫陶が不足しているのである。現在の差し迫った問題は、中国選手がサッカーとは何かということを知らないことなのだ。

だからこそ、高橋陽一先生のような方が中国にも現れることを期待してやまないのである。